



「全国高校野球100回大会に向けての願い」

西高5回 景山 健一

今夏に全国高等学校野球選手権100回大会が開催されます。我が校は鳥取中時代第1回大会に出場し、鹿田投手が記念すべき始球式後の第1球を投じています。節目、節目の大会にはほとんど出場をはたして来ている。私達も昭和28年の第35回大会に東中国代表として出場し、それから65年の時が流れ、今夏の100回目の節目の年、我が校の甲子園出場を切に願っています。私達の西高野球部の3年間の歩みを1つのヒントとして、出場の手助けとなれば幸いです。

私達の学生時代は丁度朝鮮動乱の真っ最中で、戦争特需で景気も少しは良くなっている頃でしたが、まだ食べ物も少なく野球の遠征等で泊まる宿に米を持って行かないと泊めてもらえない時代でした。(甲子園宿舎でも同様) 野球部に入部し、部室でマネージャーから皮1枚だけで、中身の無いグローブやミットを渡され、自分で補修して使えと言われ補修して使っていました。(それでもうれしかった。)その当時は布製のグローブ、ミットしか無くまたスライディングでユニフォームのズボンがすぐに破れるので、テント生地でズボンを作ってもらい、スライディング練習をした記憶もあります。練習でボールがよく破れ、キャプテンから破れたボールを10～15個位手渡され補修する毎日でした。しかしキャプテンは人より多くのボールを持ち帰り補修するような人で頭が下がりました。練習を終えて家に帰り食事をしてすぐに最寄りの小学校グラウンドに近郷の者が何人か集まり、バットの素振りを100～200回する毎晩でした。冬の練習は特に「酷」で3年生3人対1年生1人での「※のぼしキャッチボール」というのがあり、落球するとその都度、素足で薄氷の張った雪のグラウンドを1周させられました。その後は冷たいのとかゆいのとで立っておれず、直るまで廊下をゴロゴロとしていた経験もしました。その他「※のぼし柔軟体操」で極限まで身体を酷使し苦痛の連続でした。そうこうするうち私達も3年生となりました。監督が交代する監督不在の時期に3年生何人か集まり1日の練習計画をたて練習する毎日で、そのせいか自主性もできチームワークもよくなったと思います。特に力を入れたのがフリーバッティングで、打っている人

が良いバッティングをすると、ナイスバッティングと褒め、ミートの悪い時には30センチ前でミートしてボールは打つな、身体が開いているとか注意し合いました。打つのが終わった者はセカンドベースに行きバッティングしている人の打球に応じて、いかに早くホームベースを陥れるか幾度も幾度も練習しました。内野ノックの時など、日が暮れてボールがよく見えないなか、ボールに石灰を塗ってのノックでした。ボールが見えないので捕れないと言うと「心眼」で捕れと言われノックを受けましたが、不思議と怪我人は出ませんでした。またベースランニングは喉から血が出るほどやらされました。夜学の生徒の授業が終わって下校した後、30分間位はベースランニングをさせられました。

春の大会が始まり、私達は境高校に敗れ「夏にはみておれ」と悔し涙を流しながら帰校、負けた悔しさをバネにさらに猛練習に励み、夏の大会では境高校を破り県優勝。東中国大会(岡山、島根、鳥取の3県で1枠)も勝ち抜いて甲子園出場を決めました。その時の全国の甲子園出場校は23校でした。1回戦は松商学園(長野)に勝ち、ベスト16校に入りましたが2回戦で宇都宮工に敗れました。その後四国国体を選ばれ、1回戦で善戦しましたが中京商業(その時の国体優勝校)に延長12回で惜敗しました。夏の県大会、東中国大会、甲子園大会、国体共に、監督のサインは3個で、変更することもありませんでした。あとは選手同士での目と動作がサインで、当時は選手同士の心がよく読めていた様に思います。以上が西高野球部の我々の3年間のあらましです。この3年で色々の事を教わりプレーに対するプライドや自信ができ、人間的にも成長出来たと思います。また、食べ物、物資の少ないのによく耐え抜いてこられたとしみじみと思います。

高校野球100回大会出場に向けて、これらが1つのヒントになれば幸いです。

私の私論ですが、現在のマンネリ化した練習方法を捨て、新しい試みに挑戦してもらいたいし、部員への指導はただ技術を教えるだけでなく、いかに野球というものを理解させるか。また自主性も助長させ、選手自ら考えて行動するよう指導して欲しい。更に野球の基本の繰り返しに徹して欲しいし、指導する人ももっと野球学を勉強し野球力学(物理、力の原理など)を教えて、若い人の新しい夢風を吹き込んで高校野球100回大会の出場を目指して頑張ってください。期待しています。

※のぼし：体力と気力の限界まで行うこと